

公共空間における教団の役割

二〇二三年十二月二十日、第十二回宗門教学会議がオンラインにて開催されました。今回のテーマは、「公共空間における教団の役割」です。

日本において、国家・権力と宗教との関係が社会問題となつていきます。宗門における国家・権力との関係は、「信教の自由」を抑圧されたことへの反省から、国家からの強制への批判、国家がもつ権力への批判を中心として問われてきました。この際、「国家・権力を批判する教団」として、「国家と教団」を二項対立で理解していくことができます。この立場が重要であることは間違いありませんが、「多様な利害や価値観、世界観をもつ個人や集団が共存しつつ、共通の社会を構成している」という前提のもとに、開かれた討議と合意形成に参加していくような社会空間（『政治と宗教』岩波書店、二〇二三年）である「公共空間」における「宗教と国家・権力・政治」との関係問い直すためには、「国家」と「教団」という二項対立のみではなく、国家と個人との間に教団を立て、国家にも個人にも与しない教団独自の立ち位置を明らかにするという視点も重要になってくると考えられます。そこで二〇二三年度は今後、社会の中で宗教教団がどのような役割を担うべきであり、本宗門独自の役割はどこに見いだせるのかといったことを議論するため「公共空間における教団の役割」をテーマとしました。

第十二回宗門教学会議では、委員として東京基督教大学名誉教授の稲垣久和氏、東京大学名誉教授の黒住真氏、龍谷大学名誉教授、本願寺史料研究所所長の赤松徹眞氏をお招きしました。座長は、浄土真宗本願寺派総合研究所所長の満井秀城が務めました。

なお、報告は今号を含め、二回に分けて行います。今号は有識者からの提言、次号は全体討議について報告いたします。

宗門教学会議は、現代社会の諸課題に対して専門的見地を有する有識者を招聘し多角的・学際的な議論を行っています。その際になされる有識者の意見・提言は宗派の見解を代表するものではなく、宗教者が持つ知見が現代社会においてどのような位置にあり、「自他共に心豊かに生きることのできる社会」の実現のためにいかなる役割を果たしうるかを探るための参考としています。

「宗門教学会議」総長挨拶

浄土真宗本願寺派

池田 行信 総長

本日はようこそ宗門教学会議へご参集くださいました。

宗門教学会議は、「宗教者が持つ知見が現代の社会においてどのような位置にあり、より良い社会の創造のためにいかなる役割を果たしうるか」、宗門の活動の方向性を考えてゆく重要な会議として位置付けられております。

本日のテーマは、「公共空間における教団の役割」です。

現在の日本では、特定の宗教団体に関わるさまざまな事件を背景として、「国家と宗教」あるいは「政教分離」に関する議論が活発になされています。

宗門において、戦後から現在に至るまで、この「国家と宗教」「政教分離」との関係のもとに問い続けられてきたのが「靖国問題」であり、多くの研究成果が出

ています。しかしながら、「国家と宗教」「政教分離」の問題は、病院や刑務所などの公的施設における宗教者のケア、あるいは公共教育機関における宗教教育など、その射程は広く、そうした宗教の公共空間における活動には大きな期待が社会からかけられています。

では、多様な利害や価値観、世界観をもつ個人や集団が共存し、共通の社会を構成している「公共空間」において「宗教」はどのような役割を果たしていけばいいのでしょうか。

この問題に取り組む際、注意しなければならないのは、「国家と宗教」を二項対立的のみ理解してしまうことです。宗門における「靖国問題」に対する取り組みでは、次のように言われています。

靖国神社の宗教性、引いてはそこに見え隠れする、国民を統制・支配していることとする国家の宗教性（目的）なるものを、教団挙げて不可避な課題として取り組み、それを明らかにした上で、私たち一人ひとりの念仏者がそれに対して「ノー」と言える信心主体を確立し、国家や社会を見据え、時どきに批判していく、そのことが浄土真宗で「靖国問題」に取り組むということなのではないでしょうか。（『平和シリーズ3 戦争と平和に学ぶ』83頁）

ここには、「国家」に対する「教団」と、「私たち一人ひとりの念仏者」という三つの言葉があります。「国家と宗教」の問題は、「宗教」の範囲や役割をどのように理解するのかという問題と密接に関わっており、その「宗教」を「国家」と二項対立的に考え、個人の内面的な問題のみに限定してしまえば、宗教を私的な領域に

閉じ込めてしまうことになりかねません。そこで、「公共空間における宗教の役割」を議論するための一つの視座として、「国家」と「私たち念仏者一人ひとり」との間に「教団」という第三項を立て議論することは、非常に有意義なことだと考えられます。

宗門における重要な課題である「宗教と国家」「政教分離」の問題を、「教団」という視点を取り入れ、議論することで、「宗教」の意義、役割を問い直していくために、本日の「宗門教学会議」が開催されます。

本日は、お忙しい中、ご出席いただき

ました稲垣久和先生、黒住真先生、赤松徹眞先生には深く感謝申し上げます。本会議の重要性をご理解たまわり、宗門の新たな未来をひらくために、お知恵をお貸しくださいますよう、何とぞよろしくお願ひ申し上げます。

有識者発題 1

東京基督教大学名誉教授

稲垣久和氏

「公共空間における宗教教団の役割」

一・幸福と公共性

池田行信総長とは二十年程前に一緒に『戦争と追悼』（八朔社、二〇〇三年）という本を書いたことがあります。このとき私は、「公共性から新追悼施設を考え

る」という論文を書き、公共性の議論をしました。そこから二十年来、同じようなことを議論しています。それでもこの間に、状況は激変しまして、何とかして日本、また、世界における宗教の位置付けというものをきちつと考えないといけないということ、ずっと私なりに考

えてまいりました。

まず、公共性の問題を考えるに当たって、何が一番大事か。宗教との関係について、私自身は人びとの幸福に生きる権利、生存権などの感覚がどうなのかということがとても大事だと思っています。

国民幸福度という指数が、だいぶ前に国際舞台で話題になりましたが、日本は年々下がっており、二〇二三年は世界四十七位です。なぜこんなに日本では幸福度が低くなってしまったのだろうと、いろいろなることを考えざるを得ないんですが、こういう現状において、ある意味で



は、宗教ないしは教団の公共空間における役割を考える必要があると思います。幸福度は、いろいろな次元で指数化したものが算出されていますが、いわゆる社会保障、社会福祉的な面での充実度は、比較的に日本は高い方かもしれませんが、問題は、内面的な幸福です。これは、宗教の信心や信仰というものによって与えられると考える傾向がありますが、あ

えて公共空間を問題にする背景は、内面にとどまる幸福が、いかにして外面に出ていくべきか、または出ていつているのかという問いに関わるからです。

二. 公共圏と親密圏

まず公共空間（＝公共圏、以下同様）の定義です。今回の宗門教学会議の要項

に引用されている『政治と宗教』（岩波書店、二〇二三年）では、「多様な利害や価値観、世界観をもつ個人や、集団が共存しつつ、共通の社会を構成しているという前提のもとに、開かれた討議と合意形成に参加していくような社会空間」とあります。やや抽象的でわかりにくいですが、「多様な利害や価値観をもつ」というのは、すごく大事だと思います。

稲垣久和氏

【略歴】

一九四七年生まれ。東京基督教大学名誉教授。博士（理学）。専門は、キリスト教哲学、公共哲学。科学とキリスト教。国際基督教大学講師、アムステルダム自由大学哲学部・神学部客員研究員、慶應義塾大学文学部講師、ルーテル学院大学講師、東京女子大学講師などとしても教鞭をとった。一九九〇年より東京基督教大学教授を歴任し、現在に至る。著作に、『閉塞日本を変えるキリスト教―公共神学の提唱―』（水山裕文との共著、いのちのことば社、二〇二三年）、『神の国と世界の回復―キリスト教の公共的使命―』（教文館、二〇一八年）『公共福祉とキリスト教』（教文館、二〇二二年）、『宗教と公共哲学―生活世界のスピリチュアリティ―』（東京大学出版会、二〇〇四年）など。編著として、『シリーズ公共哲学十六宗教から考える公共性』（東京大学出版会、二〇〇六年）などがある。論文に、「モラル市民社会へのキリスト者の役割―公共福祉学のアプローチ」（『キリストと世界―東京基督教大学紀要』二二号、二〇一二年）、「公共哲学と宗教倫理―「幸福な社会」形成のエートス―」（『宗教研究』八三巻二号、二〇〇九年）など多数。

例えば真宗教団は、ある意味で、価値ははっきりしているわけです。しかし、「多様な利害や価値観」ではなく、一様な利害や価値観、世界観を持つのが一つの宗教教団であるとなれば、公共空間に属さないこととなります。つまり、宗教教団は、公共空間ではなくて、むしろ親密圏に属すると考える方がよいということになります。この意味は、また後で説明をいたします。

もう一つ、先の定義には、「開かれた討議と合意形成に参加していくような社会空間」とあります。社会空間には、例えば国際的な社会、一国内の社会空間、また、県とか自治体などの社会空間もあるかと思いますが、ここでは、お寺とか教会がある地域やコミュニティーぐらいまで狭めて考えた方がいいのかなと思います。

そうしたときに、公共空間というのは、私的空間と公的空間のちょうど中間にあるという定義が極めて納得しやすいのではないかと思います。私的でもな

い、公的でもない、それが公共性だということですね。

公的というのは、国家とか行政体そのものを意味します。英語では government が公ですね。私はもちろん private です。この場合、私とは、主体としての私、個人、一個の主体として私がいるということですね。そして、公共は public です。

公と私、そして公共の区別を文字の上でした後に、私なりに図を描きました。この四つの制度の間、真ん中に公共圏があるという図です。公と私の中間に公共圏があるという図です。

公とは、国家、国と理解することが出来ます。そうすると、行政は、地方行政、地方自治体などを想定してわれわれ市民に近いと考えます。これを第一セクターとします。それから第二セクターは、いわゆる株式会社であるとか、さまざまなタイプの企業です。そして、第三セクターは、Non-profit Organization (NPO)、非利益集団のことで、利益追求を第

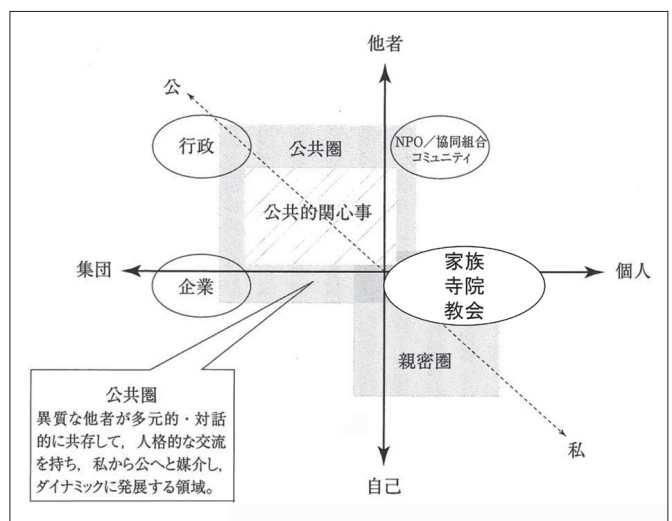


図1 「自己-他者」と「親密圏-公共圏」の図

一義的にしない、むしろ共同作業、協同組合などがその典型です。最後に、第四セクターとして、家族と書いていますが、ここに寺院、教団、教会などが入っているとイメージで図を示しています。

公共圏は、他者性が強くなってきたところが存在し、多様な価値観や世界観を持ったグループでいろいろな討議、議論をする空間です。他者性、多様性、複数性、いろんな言い方をしてもいいと思

ますが、これは公共性を議論するときには、大事な概念であって、自分と同じではないということ、まず意識してかからなければならぬ場所です。それに対して、一つの信仰でまとまった教団は、ある意味で公共圏に属することがとても難しい。むしろ親密圏に近い。信者の集合体としての教団は親密圏にあつて、それなりに価値観は統一されていて、互いの信徒の間では話を通じることが多い。しかし、その言葉は、いきなり公共圏に持つていっても通用しない言葉になる恐れがあります。ですから、どうしても翻訳という作業が重要になってきます。

ここでは、靖国神社問題との関わりを思い出していたきたい。政府が国家護持というようなことを言い出したときに、仏教、キリスト教、新宗教等々が結束して反対をした歴史があります。そのときの共通の言葉は、それぞれの信仰者の信仰的空間、親密圏での言葉ではなくて憲法でした。人間の尊厳を守るということについての言葉を、それぞれの教団

は持っているわけですが、憲法二十条とか八十九条という共有の言葉に翻訳して、信者以外の人びとと共闘しました。

三・公共空間における宗教教団の役割

現代において重要なことは、権力とは何なのかという問題です。権力とは、国家権力のみならず、貨幣や資本、市場の力もあり、そうした市場の力が非常に大きくなってしまった時代に、われわれは生きています。貨幣権力は国民のモラルの力を破壊します。人びとの結び付き、例えば血縁、地縁、同胞縁を弱体化する。人びとが孤立する時代になってしまったと指摘されることは、まったくそのとおりです。権力の構造は行政や国だけではなくて、むしろ企業の市場経済が国家・行政と結託して、先ほどの図でいえば第一セクター（行政）と、第二セクター（企業）が結託して、公共圏を覆ってしまっているという状況が現代だと言って間違いないと思います（生活世界の植民

地化）。

国家権力、貨幣権力が結託して、一部の人がその恩恵にあずかるだけで、多くの人が抑圧されてしまうという状況があります。格差社会となって中間層が消えています。中間層が消えると、結局、民主主義が育たない。民主主義が機能不全に陥っています。いわゆる宗教教団としてできる民主主義への寄与は、自由、平等、友愛というものを公共圏に何らかのかたちで翻訳し、伝えていくことです。上からの権力に抗して、下からの自治が必要である。そのために先の第四セクターの宗教教団や第三セクター（NPO・協同組合など）の相互扶助、コミュニティ活動において、協働して下からの自治を行う。そういうふうにならなければならない。この時代において、教団なり宗教は、今のような時代には、役割を果たせるのではないのでしょうか。

宗教教団に必要なことは、言葉と行動を通して翻訳をすることです。寺院がある地域においては、住職のみならず、門

徒の方々が行政や自治体、例えば市役所等で働く門徒も、企業体で仕事をしている門徒も、非営利団体で仕事をしている門徒もおられるわけです。そういう方を通して、さまざまな場面で、さまざまに翻訳をしていくことによって民主主義が成熟する方向に行くのではないのでしょうか。

結論は、もう一度先ほどの図（四セクター論）に戻りますが、公共圏における宗教教団の役割といったときに、宗教教団だけで何かをするということより、私

は特に第三セクターとの協力が、かなり効果的であると思います。例えば子ども食堂です。例えばお寺なり教会が場所を提供し、行政も支援をする。ある場合には、企業もフードロスなど要らなくなつた食物を寄付する。協同組合、農協、生協も寄付をすることで、公共空間において宗教教団が提案する、また場所を提供する、そうしたことを、真っ先に示すことによって、協力ができるといふことです。こうしたかたちで、やれることはたくさんあると思います。

有識者発題 2

東京大学名誉教授

黒住 真氏

「日本の哲学・教団がもつ可能性とは

―近代的様相・反省から見出される二十一世紀的枠組み―

一・信仰と人びとの生活

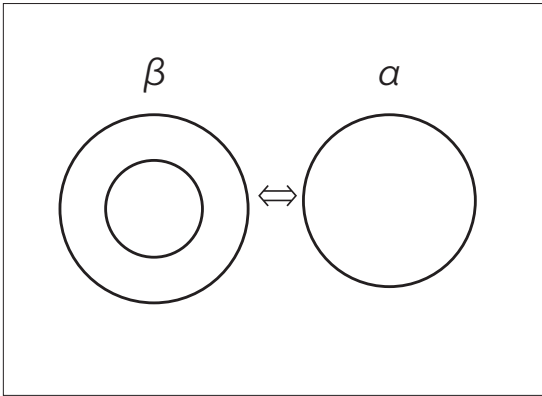
えるか、人間の思考の運動としての哲学ときちんと連関することが大事だと思っています。

私自身は、信仰の形態をどのように考

何を考えるかというときに、大きな歴

史があります。大きな哲学と信仰の歴史はどうなってきたかについて、丘山新先生の『菩薩の願い―大乘仏教のめざすもの―』（日本放送出版協会、二〇〇七年、末尾参照）をもとにまとめてみます。

広い意味では、カール・ヤスパースという哲学者が「枢軸時代」と言いましたが、ギリシャ、インドの哲学や仏教、また諸子百家などの新たな考え方のかたちのようなものができてきた時代、紀元前三〜六世紀があります。その後、紀元期に、大乘仏教やキリスト教が発生し、特に大乘仏教の中では菩薩の概念が現れだし始めます。そういう意味では、悟りの世界との媒介・救済者みたいなものとし、菩薩やキリストが紀元前後に登場して、そこで人間の魂を、ただの自然の中に入りながらも、より浄化していく。そして同時に、全体に広げていくような形態がつくられていく。丘山先生はこの時代的な様相・展開をまさに述べられています。それから、一つの完成形態のようなものが、中世から近代初期ぐらいに完



自然的秩序と超自然的秩序

岩下壮一 東京大学哲学科講義・中世哲学思想史研究より

成し、人びとの全体性にも関わるような構造ができてきます。

では、中世期の完成でどんな枠組みができたか、図を描いておきました。自然的秩序とはコスモス、いわば宇宙や自然、天地のようなものです。そこに仏教やキリスト教が入ってくることによって、もう一つ別の充実した完全な世界をつくるわけです。ただ悟りの世界は無関係ではなく、媒介者としてキリストや菩薩が考えられる。それが魂の在り方にもなっていて、実践的な運動にもなり、世

界観にも関係していきます。例えば仏教

でいう六道など、人間もある種の中間の魂で、そこからさらに悟りにも向かっていくような間の存在となるわけです。

これは、(人間界の拡大といえる近代以前の) 中世により見出せる超越的完成、その世界といえます。この世界をめぐる実践的な運動体をキリスト教の中ではつきり言ったのが、日本では昭和前期、カトリックの神学系統の哲学者である岩下壮一という人です。この人は、先ほどの図のβの丸が祭祀(祭り、儀礼)だと言いました。お葬式、結婚式、それから誕生したときにはある種の儀式を行うわけですが、そうした儀礼と関係した人間の基本型のようなものがあるわけです。こうしたことをきちんと意味付けるべきだと岩下は言っています。例えば、関東大震災の後、お寺や神社も被災しましたが、「壊れたけども、仕方がない」といつて代わりに高い建物をたてて塔建築を喜ぶ日本人の言説をうけて、ニューヨークのように高い建築が本当の人間の文化な

のかと述べています。

また、岩下は日本の宗教がテキスト解積だけになっていることが問題だと言っています。例えば、仏教が仏典の解釈だけに、キリスト教が聖書学だけになってしまつて、人びとの生活に無関係になつてしまつたら問題だというわけです。キリスト教では、岩下の他に新渡戸稲造・賀川豊彦たちが実際に、教会や学校、また病院などをつくる運動をやつています。人びとの生活に実際に関わつていくようなことが宗教者の仕事だったといえます。

二・資本主義の拡大がもたらす問題

問題として近代になると、人間の社会的な組織が拡大し、そこに資本主義がぶつかつて大きな運動をするということがあります。十九世紀の終わりから、二十世紀にかけての大きな時代的事件だと思えます。ですから、二十世紀の人間は、ある意味でいい生活をした面もあります

が、片方で金儲けのための戦いを繰り返して、互いの差別や、動植物に危害を与え続けたと言ってもいい面があります。

このような問題が、まさに第一次世界大戦や第二次世界大戦になって出てきています。ここには勝敗や善悪を決めるだけでは済まない、まだ十分に考えられていなかった問題があると思います。

例えば、先ほどの図で α と β とありましたが、西欧ではまず β の中の方、教会論に当たるようなことをあまりやらなくなっていく、さらには α という自然的な枠組みそのものも解体していく構造が非常に強くなります。だからコスモス的な自然観も含めた枠組みのようなものが、西欧の近代では消えていく構造があるわけです。そこにマルキシズム、資本主義などが動き、人間がそれに憑りつかれていきます。それでも、初めのうちはまだ枠組みが残っていました。例えば、アダム・スミスの『国富論』では、人間の経済システムの運動は「見えざる手」によって位置付けられていると言っています。と

ころが、だんだんそれが消えていき、その後はマルクスやニーチェ、ハイデッカーなどが主流になっていきます。

ただ一方で、コスモス観や昔のキリスト教とも関わった宇宙観のようなものを見つめる運動があり、その一つの例が「中世におけるアジール」です。教会、寺院などが人間にとっては重要だという運動がありました。

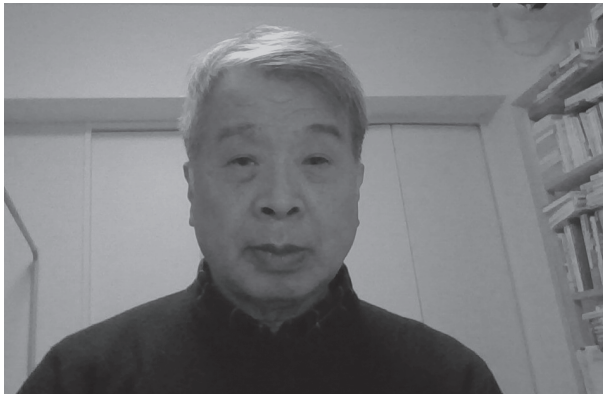
人間の近代史を見返すと、先ほど来述べている α と β 的な枠組みを、キリスト教も、仏教もかなり壊されている面があります。だから菩薩も何もいなくなったような世界の中に、金儲けや労働の運動が人間を動かしてしまっています。それで一見うまくいった人はいいけれども、しかし非常に大変な問題が出てきているのが二十世紀以後だとも言えるわけです。

こうした問題をどう見るかですが、日本、特に近世の場合は幕府とも関係して、制度が人間を位置付けてしまった面があります。例えば、幕府が提出した「排切支丹文」という誓いの文章みたい

なものがあります。そこには、神国論とか仏教や儒教を入れ込んでキリシタンは恐ろしいといった排耶論を展開しています。これは逆に言うと、仏教そのものが持っていた救済論みたいなものが、なくなっていく面があるとも言えるわけです。

ここから制度的にどうなったか。小崎弘道（同志社第二代社長〈現総長〉）は、神道・仏教・儒教のそれぞれについて、仏教系統はお葬式、神道系統はお祭り、儒教系統は学問や道德系統のことをやるといったことが排耶と結び付いた形態として江戸時代にできあがり、それが維新後の日本にも連関したとまとめています（『国家と宗教』「日本基督教史」）。

そうした構造が本当にどうだったかという検証は必要ですが、例えば、祖先崇拜が日本では多くなったといわれています。この祖先崇拜ですつとつながらなければいけないということがあまりに強くなりすぎると、救済が十分に考えられないことにもつながる可能性があります



し、血縁を超えるような考え方が出てきにくいことも、江戸期につくられたかたちであると捉えることができます。とはいえ、そうした形態がある程度あったとしても、一方で日本では人間の生活そのものにとっては、非常に重要な動きをした面もあります。例えば、農民や商人、職人などの人びとの生活は農業・漁業・林業などを基礎として、商業・工業でさえ大きくは生成・贈与の中

に位置づいていました。ですから、日本の経済論、商業論は、お互いのやりとりをしながら形成し持続するという昔からの枠組みがすくあつたわけです。相互扶助が閉じた談合になれば問題です。しかし、宗教と結びついて開かれるなら救いです。ところが近代化において、それがどんどん壊れていきます。「株」といっても、もともとの比喩は植物の株からきています。根っこがあつ

て、だんだん育っていったって、花開いていくという、植物の在り方と人間が実際の利益を持つということとは比喩になっていたわけです。しかし、それが金儲けしか考えない株になるとというのが近代史の構造です。こうした構造の問題が、第一次世界大戦、さらには第二次世界大戦の問題として出てくるのであり、中心のテーマとしてあるのが、自然的秩序と超自然的秩序の、 α と β の間になります。

黒住 真氏

【略 歴】

一九五〇年生まれ。東京大学名誉教授。博士(学術)。専門は、東アジア日本思想史、比較思想宗教、神学。東京大学及び同人文社会科学大学院を修了後、東京理科大学助教授、東京大学教養学部助教授を経て、東京大学大学院総合文化研究科・教養学部教授を歴任し、現在に至る。著作に、『文化形成史と日本』(東京大学出版会、二〇一九年)、『複数性の日本思想』(二〇〇六年)、『近世日本社会と儒教』(二〇〇三年)、また共著『日本の祭祀とその心を知る 日本文化事始』(福田恵子と二〇二一年十二月、以上三書ペリかん社)。編著として、『日本思想史講座』(全五巻、ペリかん社)、『岩波講座日本の思想』(全八巻、岩波書店)などがある。論文に、「近世日本における公共のゆくえと現在」(『思想史研究』二〇〇号、二〇一四年)、「公共形成の倫理学―東アジア思想を視野に―」(『公共研究』二巻四号、二〇〇六年)など多数。

これは、キリストや菩薩が何なのかという問題と関わりますが、実際の仏教、キリスト教は、血縁関係ももちろん大事ですが、それをもう一つ別のかたちで乗り越えるような構造を持っています。そのことをはつきり発見しなければいけないという問題が、特に第二次世界大戦の後のテーマとしてあるのではないかと思います。

三、「人間」と慈悲・愛

私は先ほどから、 α と β と書いていますが、 β の中の中心的なものは何なのかを大きくいうと、社会性です。公共性と言ってもいいです。日々の習慣、儀式、儀礼などに社会的組織や教団、教会が関わっていくことです。お葬式が要らないというのではなく、人間そのものにすごく関わっているわけですから、よき儀礼は非常に大事なことだと思います。実は、このことを哲学者としてはつきり主張したのが、ベルクソンです。彼

は、第一次世界大戦の前に「生命の飛躍論」を述べ、第一次世界大戦を体験した後に、『道徳と宗教の二源泉』を書いていきます。ここでは、人間は、そもそも閉じられた社会に生きているが、ただそれだけでなくて、開かれた社会をも持っている。そして、そこに人間の生きた機能があり、それが愛という問題にもつながると言っています。

このようなベルクソンの考え方は、現在でも意味があります。比喻として言えば、宗教は、社会貢献の運動体でもありと考えると、こういうような運動をベルクソン系統の中から、実際の寺院、神

社、教会なども関連して見いだすことができるのではないかと思います。それは、生活や関係において慈悲、愛を位置付けることになり、また現代のエネルギの所有や成長にとりつかれている面を捉え直すことにもなります。大事なことは、戦いや上昇ではなく、従来の枠組みからさらにより横の関係をつくることです。それに向かういくつかのテーマに私たち自身が関わっていけばいいのではないかと思います。

総合研究所 現代教学・課題研究室

丘山新『菩薩の願い―大乘仏教のめざすもの』(NHKライブラリー)二〇〇七年四月

目次

仏教のめざすもの／インド文化の基本的色彩／ゴータマ・ブツダの宗教的目覚め／大乘仏教の誕生／大乘經典の創作と流伝／般若経―空と利他行／維摩経―在家の菩薩／法華経―永遠に働きつづける如来／浄土經典―浄土への願い／華嚴経―壮大なる世界と求道の物語／涅槃経―如来常住と仏性／私たちの願い